お出でなされた

——アナキストの宣言——

一、初めに一言

『女人芸術』十一月号に、隅田龍子という人が、「八木、高群両氏のアナキズムに対する駁論」なるものを書いていられる。ひとまず拝見すると、何故にプロレタリア独裁は必要かとか、何故に無産者の政治行動は無産者を墮落に陥れないかとか、いかにプロレタリアートは議会を利用するか、真の過程なるものはいかに展開すべきかとか、等々いつている。

よくも君達は、そういうことを論じて退屈しないものだ。もっともわたしにしても、かつては君が見たように問題を思惟の世界においてのみ見たことがある。だから君は、たぶんお年も若いことだし、いまがそういうことをしたがる盛りだろうと考えられるから、まあ無理だとは思わない。

しかしながら、わたしはいうが、そういうことはいつまでしたってきりのないことだ。

結局のところは、「我々はこう信じる」いや「我々はそれを信じない」というような、信じる、信じないの範囲以外のものではないから。

何故に、無産者の政治行動は無産者を墮落に陥れないかなど言ったところが、實際墮落に陥れつつあるのならば？

いかにプロレタリアは議会を利用するかといっても、よく君のいうような意味において利用が為されつつあるか？ 事実はいかに展開しつつありや？ ということが重要な問題ではないか。

わたしは事実の展開に対してのみ信を置く。そのみ必然であると考え。「いやあれは嘘の事実だ。真のマルキシストの事実はあるべきではない」と叫んだところが追っつかぬ。天文学者が「明日は雨だ、学理がそう決定する」という。ところで雨どころか日本晴。すると学者が、「だがこれはどういっても雨だ。晴天などとは信じられぬ。これは嘘の事実にし過ぎない」なアんでね。

真の過程なるものは、いかに展開すべきかなどといっても、暇つぶしの議論としてならともかく、真の過程も嘘の過程もあったものではない。事實はもう展開してしまっている。君たちの非合法の立場というのもその一つだが、ここで我々の論じる重要な題目は、真の過程なるものはいかに展開すべきかではなく、なにゆえにかく多くの過程（それ自身では、いずれも我々による立場こそは、現段階における必然の過程であると考えている。君が非

合法の立場こそ真の過程であって、その他のものはすべてブルジョアジーの忠僕としての過程であると信じているように、他のものもまたそう信じている）が出現したかにある。

君との議論は御免をこうむりたい。もし出直してくる気なら、事実を前にしての議論できてほしい。我々がいかに「かくあるべし」「かくあるべきはずなり」と論じてみたところで、それこそ一昔前の哲学を追うようなものだ。ダーウィンは「神は在りや」という問に答えて、「我は知らず。彼を見ざるが故に」といったそうだが、君たちもちっと思惟の世界から出てきて、「今日の無産運動はいかに展開しつつあるか」でも見たまへ。我々のそれぞれ異った立場からする批判は、それぞれ異った見解において為されるであろうが、それこそ望むところではないか。そこにのみ、今日の生きた論争はありうるではないか。君とのようなチグハグな対立における議論は成り立ちもしないが、やっても無駄だ。だから議論はしないで、お話をすることにしよう。

まあお聞き。君は「我々のみが共産主義者で、それは現段階にあって非合法主義の立場を取るものだ。彼等合法主義者は、無産大衆党から社民党に至るまで、すべて社会民主主義者でブルジョアジーの忠僕どもである。我々共産主義者は、彼等と絶対的に闘争する」という。

君のわたしに吹っかけている議論のほとんどすべては、わたしが「種々雑多な社会民主主義者と君たち共産主義者とを一律に論ずる」ということにある。しかし、そういえば君

にしても、「それらの社会民主主義者」だの、「それらの労働者の一部に派遣されたるブルジョアジーの忠僕」だのと一律にいい、自分のみが共産主義者だといっている。

わたしが一律に見ているのは「アナーキスト一流の混同的観念のため」だというが、君のは何ですかね。

もっとも、一律とはどんな意味になるか実のところはわたしは知らないが、君たちのみを真の共産主義者だと見ることが一律でなく、そうでなければ一律だというのだったら、わたしは一律の方が好きだね。

隅田龍子と猪俣津南雄とを並べて考えて見る。君に従うならば、隅田龍子のみが共産主義者で、猪俣津南雄はブルジョアジーから派遣された忠僕だということになるが、そのどちらもマルクスを叫びレーニンを歌っている。しかも、履歴からいっても、猪俣津南雄のみがブルジョアジーの忠僕であるとは思われない。忠僕なら忠僕で、二人ともそうだとすれば分かりがいいが、しかも何によって共産主義者とニセモノとを見分けるかといえ、君の説では、非合法主義者であることが何より本物の証拠だというが、それがまたわたしには分からない。

第一、合法非合法の問題は、弁証のいかんによってそのいづれをも真正の共産主義なりとすることができ。第二には、レーニン主義の立場に立つとしても、合法の仮面のもとに非合法を標榜することはありうるらしいから、(現に無産大衆党も、またその他の一、

二の政党も、社会民主主義という名前をもって呼ばれることを肯んじていない)そのいづれが真のそれなりや、直ちに判断し得られない。だから、そこには「いわゆる合法」と「いわゆる非合法」とがあるのみで、「いわゆる非合法」をもって、真正共産主義者の現段階において取るべき闘争形態であるとしたのは、大山さんを指導者とする新党準備会解散後の政獲同盟の態度ではなかったか。しかも、今や当人の大山さんはすでに非合法の誤っていたことを声明して合法へ出発した。

念のために、大山さんを一頁読みましょうか。その前にこういうことを言いたい。君は、社会民主主義者というものを絶対的に排撃すると言い、それらのものの陣営は、君たちのところから全然飛び離れたところにあるように思っている。

しかし、かえってわたしの一律論が、直覚の鋭さをもちうるのかも知れない。わたしは、君たちは必然的にいわゆる社民主義へ出発する過程におかれてあると思う。君たちが君たちの運動をまじめに続けて行こうとするならば、君たちの考えは、そして運動は行きづまらぬわけには行かない。社民主義は君たちにとって地続きだ。が、今はそれよりも大山さんのお話に移ろう。昔、といっても遠いことではない、昭和四年だから今年だ、その今年の五月の『改造』で、大山さんは「見よ、彼等左右両翼の社会民主主義者は、ブルジョアジーの諸利益の侍女としての卑屈な役割を演じている。我々は徹底的にこれと戦わねばならん！」と叫んでいる。どうです。そっくりじゃありませんか。「ブルジョアジーの侍

女」が、君の場合においては「ブルジョアジーの忠僕」と変っているだけだ。さらに大山さんは何とっているか。「我々が、社会民主主義者に鋭く対立する我々の左翼的立場を、少しでも緩和したり、ごまかしたり、譲歩したりする必要は毛頭ない」かくて「おお、日本の社会民主主義者たちよ！ 君たちは、どの階級の陣営へ、行こうとしているのであるか？」と大山さんはいっています。

けれど、こうした言葉のあてにならぬものであることは、すでに御承知の通りである。「我々が、社会民主主義者に鋭く対立する我々の左翼的立場を、少しも緩和したり譲歩したりする必要は毛頭ない」と叫んだ大山さんは、九月の『中央公論』では早くも、「新労農党樹立の提案」というものを書いていられる。それを見ると「従来我々は精神のつづく限り悪戦苦闘した。が、我々は今、一つの疑いを起こしている。それは我々が死物狂いになればなるほど、我々の手足が緊縛されるのを感じ、また同時に、我々の活動は我々の必然的努力に頓着なく、段々と行き詰まりの徴候を示すようになり出した。大衆的規模における闘争は、我々の手によって遂行することが、刻一刻困難さを増すようになった。我々の主催もしくは参加の下においては、演説会一つが完全に持てないようになった。かくて我々は必然にリなゆえに？」の問題にうつったのである。そしてそれは、実に我々が現在取っている政治的自由獲得労農同盟の闘争形態（非合法的）が、現下の状況に対する適応性を失ったところから来ているのだというのが、我々がこの点に関して究極に到達し得

た断案であった。かくて我々は、従来の闘争形態を捨てて、ここに合法的政党として、公然の舞台における活動に進出する！」と大山さんはいっている。すなわち、ここにおいて大山さんは従来の左翼的立場を緩和した。「おお、日本の社会民主主義者たちよ！ 君たちはどの階級の陣営へ行こうとしているのであるか？」と昔大山さんが言った言葉は、そのまま大山さん自身に今は浴びせかけられつつある。君は恐らく「大山の裏切者、新しい左翼社会民主主義者！ できたてのブルジョアジーの忠僕！」と彼を罵っていることだろう。だが、しかし、かくのごとき歴史的事実を前にする時、わたしはそれらの君の言葉を信ずることができない。その言葉は現在にあっては、あるいは正直な言葉であるだろう。が、それにもかかわらず、深い根拠あるもの、とにわかに信ずるわけにはいかないのである。「我々は社会を死んだものとしては観察しない。複雑きわまりない、変遷の中に社会の諸事実を見ている」などといっても、そういう言い廻し方を君がすればするほど、わたしはなおさら君を可愛い嬢ちゃんだと思わないのである。嬢ちゃんというものは実に無鉄砲だ。君のいう通り、社会は複雑きわまりないものである。さればこそ大山さんの今度のことも起こってきた。わたしは、大山さんのいわれることをまじめに取る。彼は正直である。そして彼のいう通り、彼の従来の闘争形態をもつては、「現下の状況」に適応することはできない。彼の進出は必然である。あらゆるかかることは必然によってのみされて行く。必然にそう進まずにはいられないところに問題の重要性はある。

わたしがいつぞや書いたのは、この必然を基点としたものである。彼は何故そうした進路を必然に辿らねばならないか？ 彼がにわかブルジョアジーに鞍替えし、ブルジョアジーの手へ無産者を売り渡そうという企みを、その胸に蓄へはじめたからであるか？ 否、彼は昔と変りなく純真である。彼は無産者の運動を拡大強化せんがために心を砕いている。しかもその結果として彼は、「現下の状勢」に適応するの必要を知った。その「現下の状勢」なるものは、支配階級によって作り出されているものであるから、それに適応するためには、今や「非合法」とか「共産党」とかいつているべきではない。かくて一歩ずつ、彼はブルジョア議会政治に対して善くいえば利用、わるくいえば妥協して行く。しかもである。「利用」という意識はかかる運動の道程においては時と共に失なわれて、幹部の椅子争いでないならば、妥協および当面の党勢力の拡大ということのみが運動の対象になって行く。その事実は今見る通りである。わたしは事実に興味をもつ。わたしは事実がいかに発展するかを論ずる。

わが国のマルキストの中で、より多く實際主義的の傾向をもつところの人々は、全て早く、もしくは順次に、いわゆる左右両翼の社会民主主義党なるものの中に入り、残るはマルキストの中で最も非實際主義的、坊ちゃん嬢ちゃん的の者のみとなった。その坊ちゃん嬢ちゃんの連中に最後までまじって踏みとどまっていた大山さんや河上さん（これらの人もまた坊ちゃん嬢ちゃんであった）も、今度でいよいよ社会民主主義へと出発したので

ある。

わたしの過程論は、この一般的事実を基点とするものだ。いわく、マルキストは理論から行動に移る場合において、社会民主主義化し、然して、その最後において、マルキズムそれ自身をすら否定せんとする一般の傾向を強くもっている。然して更に、これを無産階級の立場に基いて考えるならば、マルキストは理論から行動に移る場合において、一歩ずつブルジョアジー化し、（その忠僕とまでは行かなくても）その最後においてほとんどブルジョア政党と同様の性質のものにまでなる一般の傾向を強くもっている。ドイツその他においてこれを見るが、これらの国の無産政党は、今後において、いよいよ益々その自らの宿命を裏書きし、そのあげくには、世界の無産階級をして第二次の政治運動幻滅期にと到達せしめるであろう。すでに世界の無産者はよく第一次のそれを経た。そのときに当たって、無産階級は政治運動から経済運動へ、強権組織から自治組織へと変わり、フランスを発生地とするサンジカリズム運動が、一時世界の無産階級を席捲したのである。しかし、その運動は支配階級の恐怖的の弾圧と、またそれ自身の欠陥とのために勢力を失墜したが、将来における第二次の政治運動幻滅期にあっては、この無産階級の自治的精神と、経済的の戦法とが再び形をあらたにし、組織を完全にして台頭するであろう。

わたしがわたしの立場から論ずるのは、マルキストの社会民主主義化が、いかんともし

がたい必然の過程である一般的事実と、——逆理的のようだがわたしはいう。マルキストの中で最も尊敬に値する力量あり、真面目である人であればあるほど墮落して行く。——その原因は、その政治主義にあるということに対してである。ゆえに、わたしは早くいえば、無産政党にあっては、非合法主義は必然的に合法主義の前にたおれ、合法主義の中で左翼的色彩をもつ政党は、必然的に右翼のそのの前にひざまずくということを実事としても見また信じている。昨年二月、無産政党最初の総選挙に際しては、きわめて実際的な政評家であるとされる山川均氏ですら、「現在無産政党は四つあるが、中には無産政党であるかどうか疑わしい若干の政党もある」と言っている。その若干の政党なるものは、社会民衆党であり、日本農民党であったのである。日本農民党は今解体しているから言わないとして、社会民衆党をもって無産政党なるか否かと疑っていたのは独り山川氏のみでなく、当時の一般的事実である。ブルジョア新聞などですらも、そんな風に解釈しているような風があった。山川均氏の夫人菊栄氏が、当時東京朝日新聞に発表された評論の中にも、無産政党としては労働党および日労働——この二つの名をあげていられるのみである。当時はそれでよかったですのである。しかし、今日ではどうか。社会民衆党を無産党の中から抹殺するということは、すでに敵とした事実がそれを許さないものである。無産党すなわち社会民衆党とまでは行かなくても、ますます存在性を確実にしてきていることは知られる通りである。無産政党に対する社会の批評の標準は、政治の実際的経験——僅か一

度の総選挙を経たばかりだが——によって、以前のような純理的の傾向を清算し、実際をもって臨むようになってきている。

かくて政治的の経験の度の増すと共に、必然的に——ゆえに合理的に——左翼は右翼の前へたおれねばならない。否、ねばならないのではなく、現にそうではないか。「斜面の一点に突っ立ったものは、すべり落ちることが必然的、合理的の過程である」とわたしはこのまえ言ったように憶えている。斜面の最高峰はすなわちマルクス主義で、今日の日本におけるマルクス主義流行の必然的原因は、「世界のあらゆる国を見ても、今日にあって日本のようにマルクス主義流行の国は見当たらないということだが」日本の無産階級が初めて普選を与えられ、初めて政治運動にと出発したがためであり、その証拠には、最初の総選挙前後が最もマルクス本が売れ、今年に入ってはガタ落ちに落ちてきたという事実を見るがいい。

これらの一切の事実をまえにして、わたしはお話をしているのであるから、それに対して答えるつもりならば、やはり事実——わたしの挙げた事実を否定することのできる——をもってしなければならぬ。第一には、すべてのマルキストはそれがお坊ちゃんお嬢ちゃんではなく、実際主義的人々であればあるほど、非合法主義をしりぞけて合法主義につくという事実、第二には、無産政党における右翼の進出の事実——国内的にも世界的にも——、第三にはそれらの右翼化した政党であればあるほど墮落的であるという事実、まだ

いくらもあるが、さしづめこの三つ事実をもって否定してほしい。

二、アナーキズムと政治運動

隅田氏はアナーキストの政治行動否定は反動的ユートピアであるといった。その立論はいかなる基礎においてされているかというと、「過去の歴史において、奴隷制の社会における奴隷たちは、その主人に対して一揆を起したが、ついに主人の掌中より出ることができなかった。それは彼等が組織的に指導する彼等の先頭部隊であるところの政党をつくらなかったからだ。ゆえに労働者農民も政党をつくらないならば、支配階級の手から出ることではできぬ。ところがアナーキストはそれを否定する。これ彼等が反動的ユートピアなるゆえんである。」

君はこの馬の骨だね。ある被支配者が支配者の手を出る出来ないは、その戦法いかんにあると君はいつている。誤まって（この奴隷諸君のように）変な戦法をとったばかりに、浮かび上がれるはずのものが浮かび上がらずにしまった。これでは必然論が泣くだろう。必然論では戦法などは末の問題だ。ある階級の台頭は内在的に、宿命的に——決定せられてあることではないか。そしてそれがもつ戦法もまた自ら内在的に決定せられている。そこでだ、聞きたまえ。無産政党なるものが、果して無産者において内在的に決定せられた戦法なりや否やは分らない。決定せられた戦法は、その初めにおいて必然的に自然発生と

なつて出る。ところで無産政党運動なる形式は、無産者の内部から自然発生したものとはいわれない。これに反して経済運動、かの労働組合運動にしても、また消費組合運動にしても、いずれも無知無学な労働者の中から自然発生したもので、これこそ内在的に決定せられた無産者の戦法の一つであるということは、確かに明言し得られる。アナーキストがドイツあたりのブルジョア政治とそれに見習った学者の考察になる無産政党なるものよりは、無産者の胎内から必然的に発生した経済運動をより確かであるとし、そこを基点としているわけは右にいった通りである。君は何がゆえにこれをもってアナーキストを反動的ユートピアとなすか？ 我々はより確実と信ぜられるものをもってのみ基礎とする。我々といえども、ある時期の当面の一方法としては、必ずしも政治行動を受け入れなかったわけではない。現にわたしは先頃まで、非政党運動なる一種の政治的行動を、当面の一方法として主張した。（あるいは今後も）わたしは労働者農民を今日束縛している国家の法律等に対しては、無産政党運動をもってするよりも、非政党運動をもってする方がはるかに勝れりとする信念においては少しの変わりもない。昭和二年の後半期においてせられた地主の逆襲たる立毛差押え立入禁止等当面の問題に対しては、無産政党のごとき悠長な方法によるよりは、即時的非政党運動をもってすべきではないかとすら考える。かくの如き当面の一方法としての政治的行動を時に採用することはあっても、それは強権運動に根拠を置くものではなく、経済運動を根拠としてのそれである。我々は経済運動の発展におい

て新社会の展開を信ずる。

君はいましたが、奴隸はその闘争を政党に組織しなかったがために敗れたといった。ここでは闘争の政党組織ということに全力が傾注せられる。そしてその意味では、歴代の階級闘争はすべて、闘争の政党組織によってなされたかの如くである。しかし我々は近い例についてこれをみよう。徳川幕府を倒して明治革命を成就したものは商工階級であるが、この商工階級の武家階級に対する戦いはいかなる形式をもって行なわれたか。集中された政党運動をもってであるか。分散されたる経済運動をもってであるか。政党運動といっても、もとより今日のようなものはあり得ない。当然そこでは組織化された武力運動を意味するであろう。ところが商工階級は御承知のとおり全然そうした運動はしない。ところが経済戦においてはどうかというに、これでもって彼等は武家階級に致命傷を与えた。一例を引くと、倉前の礼差業と云って、倉の米（幕府からの扶持米）を引き当てに金を貸す、これが横ついに武家階級にとつて恐るべき極裕となった。寛永十年には武家の困窮が極度に達しているとあつて、千石以下の者に采地、切米を与えたことがある。また室鳩巢は、

「物価追日踊貴、旗本中困窮以ての外の儀、宿番の衆夜着の物所持仕らざるもの多く有之候。——執政衆憂慮の御様子……」

と書いている。享保七年には、幕府は旗本後家人に扶持米を渡しかねて、三分一の内渡

462

しをするに至つた。幕府の内部、役人から全部、武家階級は挙げて困難に陥つた。松平定信は礼差に対して貸金の帳消しを命じた。これに対抗して礼差は武家に貸金を断つた。

武家がかえつて一層困窮した。幕府歴代の礼差政策は悩みそのものだった。

大名貸というものもあつて、町人考見録によると、京都の四十余人の富豪はすべて大名を搾つて身代を作つたもので、大名たちの困窮、苦心一方でなかつた。その他掛屋とか兩替屋とかも大名を相手に戦つた。蒲生君平は「大阪の富豪一たび怒れば天家の諸侯皆慄え上る」といっている。

以上は金利による戦いだ、問屋制度による商業形式の武衆搾取は、有名なる水野の改革をして、問屋制禁止を言い渡させた程である。武家の困窮は極度に達し、家斉時代には大名および人民に献金を命じ、商家に用金を命じなどしてしのぎ、悪貨を濫造したり、かくて幕府瓦解時は上も下も武家階級は挙げて極度の困憊に陥れられていたのである。

かくてついに商工階級の勝利となつたが、彼等は目的意識に貫かれた政治運動には加担しなかつた。そうした運動は武家階級の内部に起こつたもので、すなわち自壊作用に外ならなかつた。この意味において、現時の政党運動も結局ブルジョア内部の自壊運動にしか過ぎない。無産政党運動と称するも、かつての武家小者によつてなされた革命運動とひとしく、小ブルジョアの運動を意味するものである。しかして今や、有史幾千年を通ずる集権形態の没落の最後の段階にあるから、それらの自壊作用は完全に自壊作用で武家小者が

革命の当初頭職の椅子を獲得したようなわけには行かぬ。そんな夢は見ないことだ。

真の革命階級は徳川時代における商工階級のごとく、また西欧の封建時代における自由都市階級——すなわちブルジョアジーのごとく、闘争を根拠とする建設という生活形式をとらず、建設を根拠とする闘争という立場を取っている。この事は注意に値する。言い換えば、彼等にあつては日常運動が結果として革命運動になつていた。

サンジカリズムは経済運動であつたが、革命のための経済運動というところに欠陥があつたと思われる。これは一種の政治運動といつてよく、革命のための政治運動と同じものではなかつたか。後に書くが、農民運動の現実は、確かに革命母胎としての進路をたどりつつある。彼等は自ら生きることによつて、すなわち自ら建設することによつて、他方あらゆる搾取者およびその国家を死滅せしめつつ行く。そこにアナキズムの本道が展げる。人間でも慷慨悲泣したり、絶叫狂喚したりするのは本当の革命家ではない気がする。地味な役割と氣質の持ち主がかえつてそれではないか。わたしは表面花々しい政党運動の渦巻の中に革命を期待するよりは、誤解され無視されて、しかも堅実に進んで行く農民運動の中に革命を見出す。

隅田氏は「高群氏等は小鳥が空を飛ぶように、容易に理想社会に行くことができると夢みている」というが、いったいその文句はどんな意味だね。